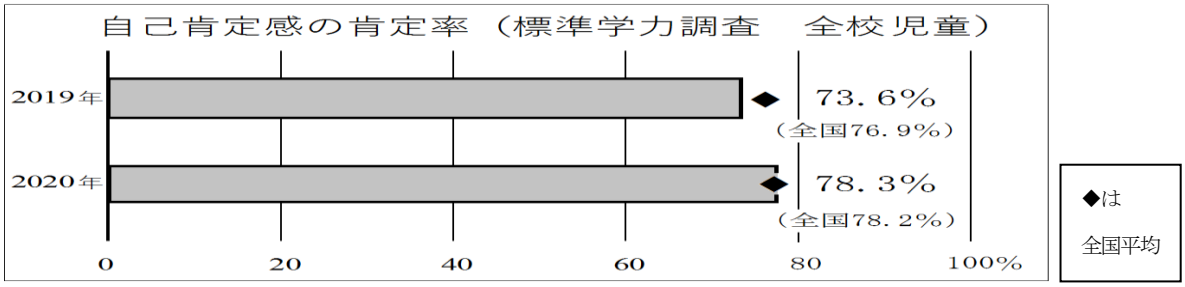
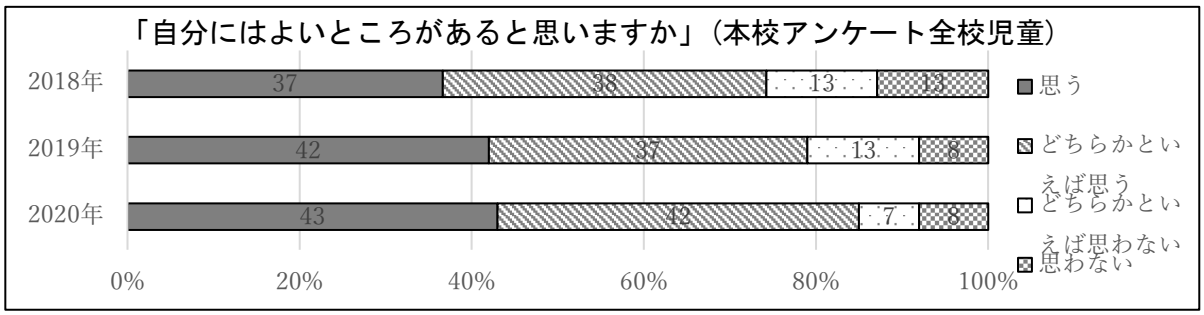
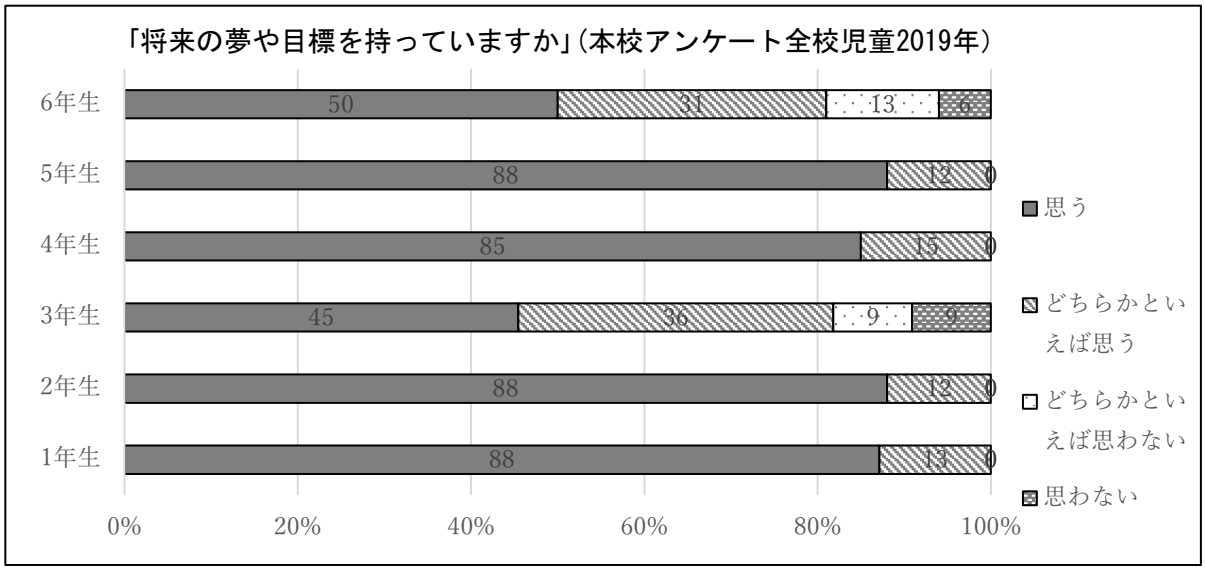
Ⅳ　研究のまとめ

1　郷土愛を育む学習活動について







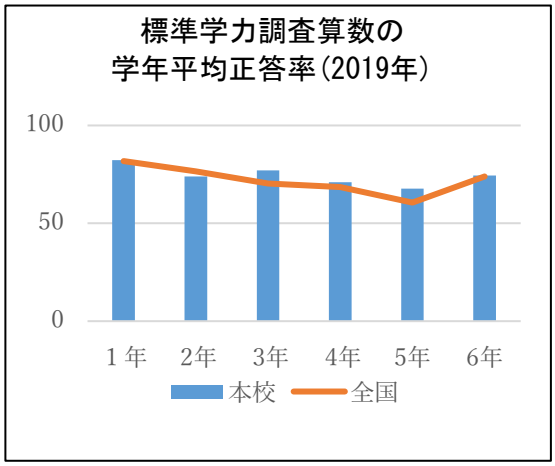
全校児童で見ると、標準学力調査の自己肯定感の肯定率は、2019 年は全国の肯定率より低いが、2020 年はわずかであるが上回った。本校のアンケートにおいても、「自分にはよいところがあると思う」と答えた児童も 2018 年から少しずつ増加している。

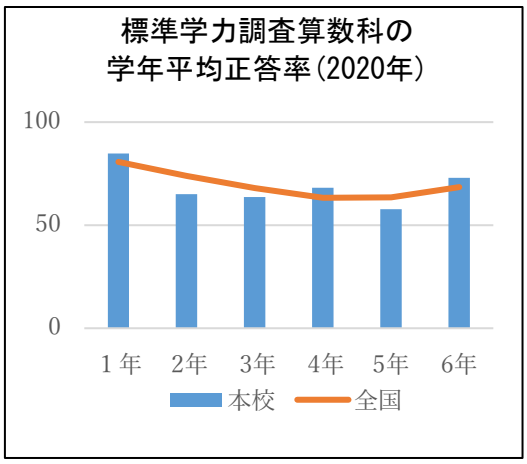
また学年ごとに見ると、標準学力調査の自己肯定感の設問「将来、あんな人になりたい、こんなことがしたい、こんな仕事に就きたいという夢や目標がありますか」「自分なりに努力したことがうまくいってうれしかったことはありますか」「勉強やスポーツ、習い事や趣味などで今頑張っていることがありますか」の項目で、複数学年の肯定率が１00%であった。

このことから、地域の人との触れ合いやふるさと学習が、児童一人一人の自己肯定感を高めることにつながり、多くの児童が「こんな人になりたい」「地域のためにできることをしたい」など、自分の将来やふるさとについて主体的に考えるようになったといえる。

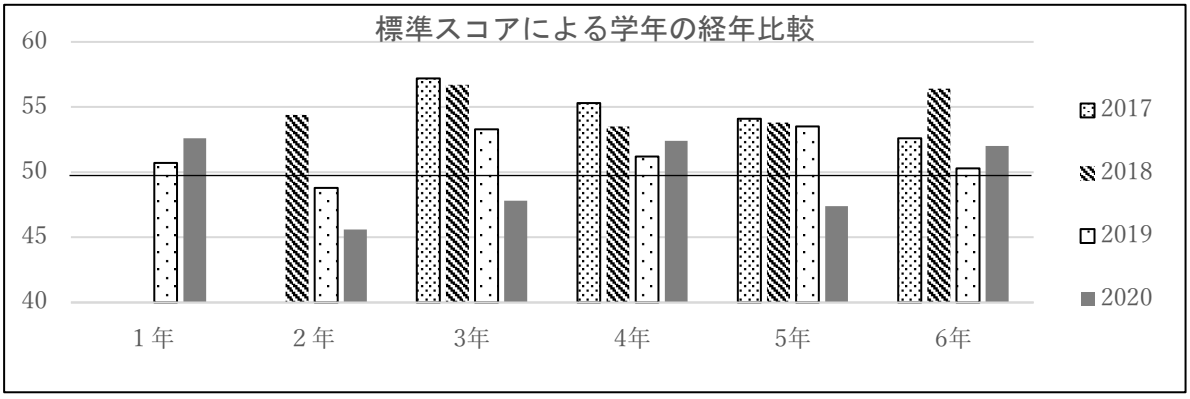
２　少人数のよさを生かす算数科の学習指導について

⑴　算数科において学力の定着は図られたか





全校で見ると、学年によっての差はあるものの、2019 年は全国平均を上回っていたが、2020 年は全国平均を少し下回った。そこでより詳しく分析してみた。



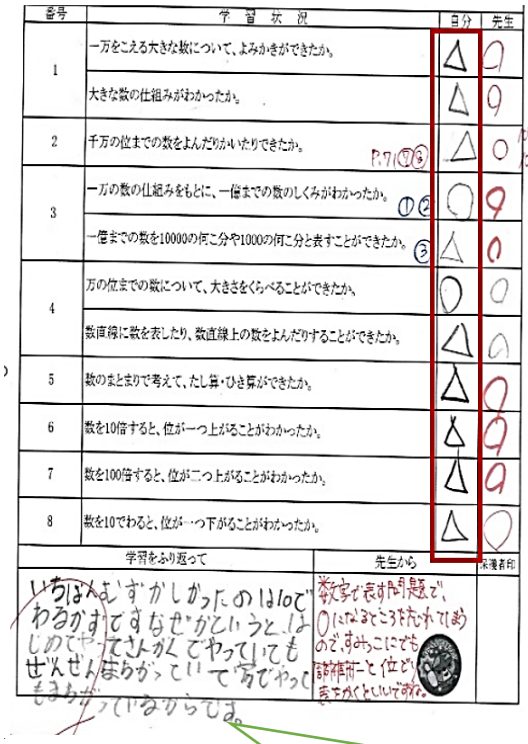
各学年の標準スコア(全国平均を 50)を 2017 年から比較すると、年ごとに標準スコアが下がってきている。しかし、高学年になると減少幅が少なくなる。2020 年度の４年生の「生活・学習習慣調べ」(P. 33 参照)を見ると、学習強調週間の家庭学習が平均 80. 6 分もあり、家庭学習の時間が算数の学力定着を促したと考えられる。また、５年生と６年生の減少幅が少ないことに着目すると、５年生と６年生で実施している夢現塾との関係があるのではないかと考えられる。2020 年は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため例年５月から始めていた夢現塾が 10 月からの実施となった。回数も週に４回を２回に減らすなど感染対策をとりながらの実施であった。2019 年度の３学期も、大切な復習の期間であったが思うようには夢現塾を開けなかった。そう考えると、週に４日の放課後の夢現塾(算数に限った学習)と、算数科の学力定着とは関連があったと思われる。夢現塾で復習をすることで「教えてもらって分かるようになった」「解き方を思い出してきたらできるようになった」という児童の意見からも貴重な復習の時間になっていたことは間違いない。今後もデータをとりながら考察していきたい。

⑵　個に応じた指導は適切であったか

ア　個人カルテで見られた５年生Ａ児の変容

【５年生Ａ児の個人カルテ】

＜６月＞

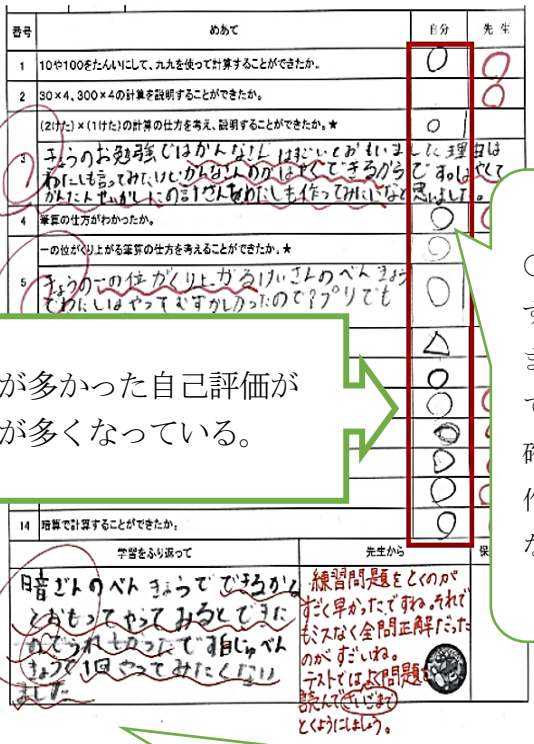


番号	学習状況	自分	先生
1	一万をこえる大きな数について、よみかきができたか。	△	○
	大きな数の仕組みがわかったか。	△	○
2	千万の位までの数をよんだりかいたりできたか。	△	○
3	一万の数の仕組みをもとに、一億までの数のしくみがわかったか。	○	○
	一億までの数を10000の何こ分や1000の何こ分と表すことができたか。	△	○
4	万の位までの数について、大きさをくらべることができたか。	○	○
	数直線に数を表したり、数直線上の数をよんだりすることができたか。	△	○
5	数のまとまりで考えて、たし算・ひき算ができたか。	△	○
6	数を10倍すると、位が一つ上がることがわかったか。	△	○
7	数を100倍すると、位が二つ上がることがわかったか。	△	○
8	数を10でわると、位が一つ下がることがわかったか。	△	○

学習をふり返って：いちばんむずかしかったのは10でわるかずですなぜかというとはじめてやってさいしょはでやっていてもぜんぜんまちがっていてもやってもまちがっているからです。

先生から：数字で表す問題で、○になるところをたくさんしてあるので、まちがえにくくなってきたかくとしいですね。

＜10 月＞



番号	めあて	自分	先生
1	10や100をたんいにして、九九を使って計算することができたか。	○	○
2	30×4、300×4の計算を説明することができたか。		○
	(2けた)×(1けた)の計算の仕方を考え、説明することができたか。★	○	
3	きょうのお勉強ではかんたんだなとおもいました。理由はわたしも言ってみたいなかんたんなのかはやくできるからです。○○さんのかんたんやくしたのをまねしたり作ってみたいなと思いました。		
4	筆算の仕方がわかったか。	○	
	一の位がくり上がる筆算の仕方を考えることができたか。★	○	
5	きょうのでの位がくり上がるけいさんのべんきょうでわたしはやってむずかしかったのでプリントでもやってみたいなとおもいました。	○	
		△	
		○	
		○	
		○	
		○	
		○	
14	暗算で計算することができたか。	○	

学習をふり返って：暗ごとのべんきょうでできるかなとおもってやってみるとできたのでうれしかったです。自主べんきょうで1回やってみたくなりました。

先生から：練習問題をとくのがすごく早かったですね。それでもミスなく全問正解だったのがすごいね。テストでは応用問題も読んでとくようにしましょう。

△が多かった自己評価が○が多くなっている。

○○さんは、すごいと思いました。早くて、簡単、正確に、計算を作ってみたくなりました。

一番難しかったのは 10 で割る数です。算学でやっていても全然間違っていて、家でやっても間違っているからです。

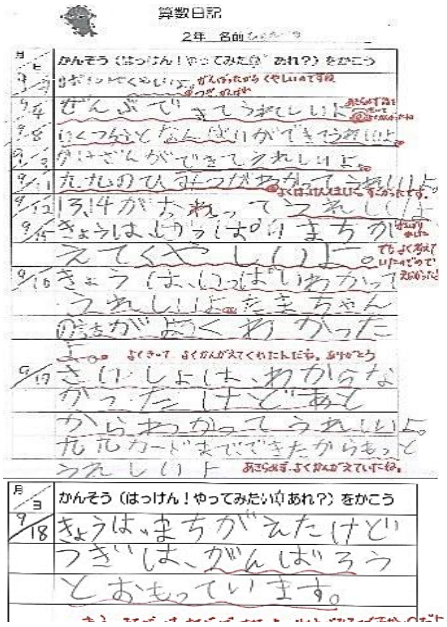
感想が肯定的になった。

暗算の勉強でできるかなと思ってやってみるとできたのでうれしかったです。自主勉強でやってみたくなりました。

５年生Ａ児は、学年当初の「個人カルテ」には、ほとんどの項目に△を付け、否定的なコメントが多かった。そこで、授業前半での声を掛けを増やし、できていることをすぐに褒めた。授業以外でも、自主勉強に取り組んでいる姿を褒めるなど個別指導を繰り返していると、９月ごろからコメントが前向きになり、徐々に「個人カルテ」の○が増え始めた。できない問題があっても自分で頑張ろうとするようになった。その後も、カルテに△を書くことはあったが、「……のようにやってみるとできてよかった」「…さんのやり方がすごい」など感想は前向きだった。１月に実施した学力標準調査の算数では、少しであったが前学年より点数が上がった。活用では 10 点も上がっていた。教師や友達から認められたことで少しずつ自信が付き、自分ができたと実感できるようになったことがＡ児が伸びた要因だと考える。このことから、Ａ児にとっては、問題を解決するための具体的な指導だけでなく、「できる」と思わせることの方が大切であった。

イ　算数日記に見られた２年生Ｂ児の変容

【２年生Ｂ児の算数日記】



9/3　できなくてくやしい

9/11 九九の秘密が分かってきてうれしい。

9/16 いっぱい分かってうれしいよ。〇〇ちゃんの話がよく分かったよ。

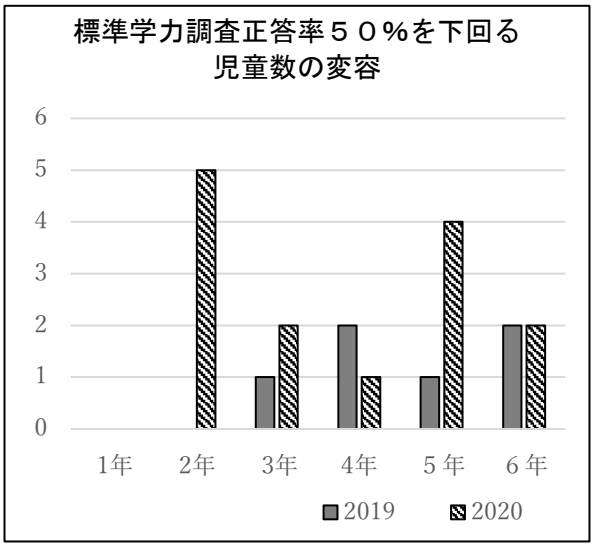
9/17 最初は、分からなかったけど、後から分かってうれしいよ。

9/18 今日は間違えたけど、次は頑張ろうと思っています。

２年生Ｂ児は、算数の問題を一人で解くことか多かったが、授業中に何もしないことが時々あった。「個人カルテ」の自己評価だけでは何が原因でやる気をなくしてしまったのかを把握できないでいたため「算数日記」をはじめ、毎時間の感想と授業中の様子を結び付けながら支援を行った。その結果、問題の解き方ではなく、何をしたらよいのか分からず困っていることが分かった。それからは、操作活動に入る時にＢ児に配慮しながら説明したり、活動を見守り声を掛けたりした。すると、単元を半分終えた頃には、分からない問題も頑張ろうとする姿が見られ、「算数日記」には肯定的な感想が増えた。授業中の個別指導も減った。このように、「算数日記」を活用して児童が何で困っているかを早目に把握し指導に当たることで、低学年では早い段階で変容が見られることがあると分かった。

ウ　支援の必要な児童数の変容

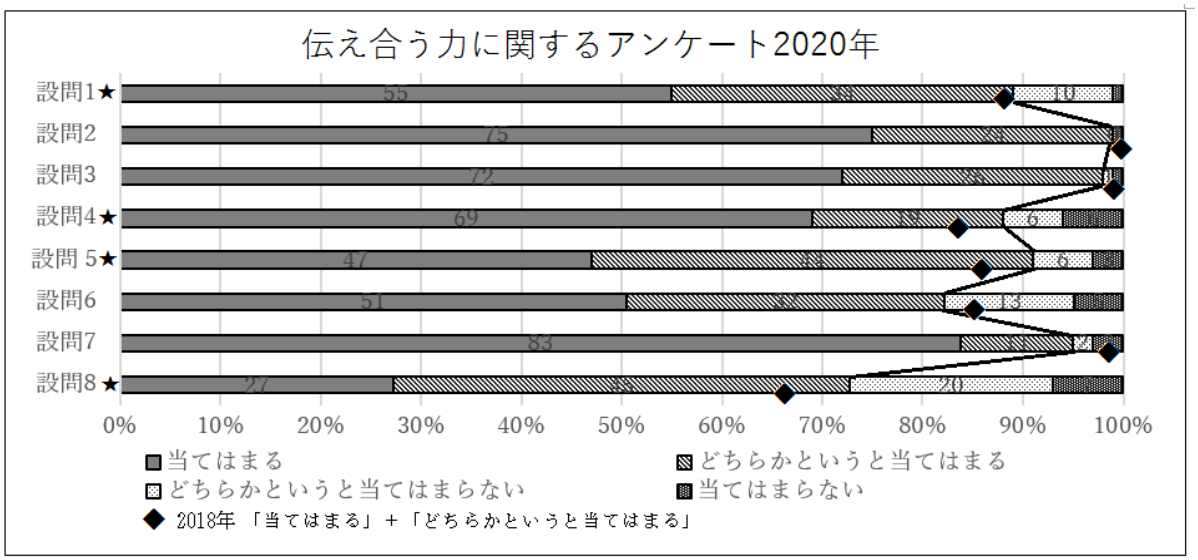
様々な調査の結果から、課題も見えてきた。右のグラフを見ると、算数科において配慮を要する児童が増加傾向にあることが分かる。今まで通りの個別指導では、底上げが難しいかもしれない。今後も、算数科における見取りや個人カルテ、算数日記での自己評価カードを活動を通して、一人一人のつまずきを見抜き、適切な指導をしていくと同時に、特別支援の観点から分かる授業を実践していく必要があると考えている。



⑶　主体的な学びにつながったか

小集団学習について児童に次のようなアンケートをした。

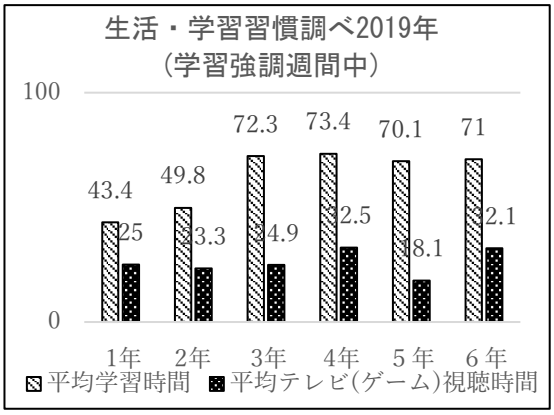
「伝え合う力に関するアンケート」
設問１★ペア学習やグループ学習のときは、進んで自分の意見や考えを友だちに伝えていますか。
設問２　ペア学習やグループ学習のときは、友だちの意見や考えを進んで聞いていますか。
設問３　ペア学習やグループ学習のときは、友だちの意見や考えを聞くと、よくわかりますか。
設問４★ペア学習やグループ学習で、友だちと意見や考えを伝え合うことは楽しいですか。
設問５★友だちの意見や考えを聞いて、友だちのよいところに気づいたことはありますか。
設問６　友だちの意見や考えを聞いて、友だちのよいところを参考にしたことはありますか。
設問７　自分の意見や考えを相手に伝えることは、大切だと思いますか。
設問８★自分の意見や考えを相手に伝えることは、得意ですか。

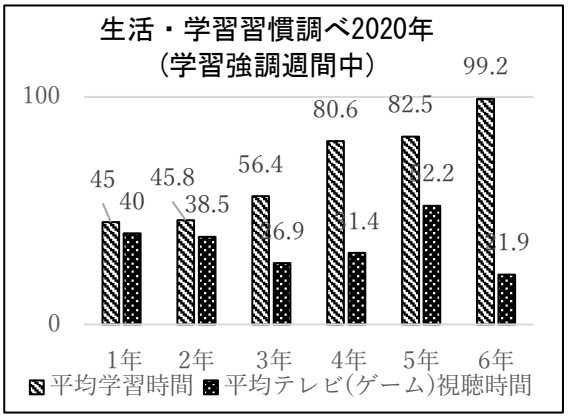


上記の 2020 年のアンケート結果と 2018 年に実施した同じアンケートを比較すると、★マークの設問において、肯定的な返答が上回った。また、その他の設問においては、2018 年の結果とほぼ同じであり、大きく下回った項目はなかった。このことから、児童は、ペアや小集団学習に意欲的に取り組み、楽しみ、伝えることに自信を感じ始めていることが分かる。また、話合いの中で、友達のよさに気付くことができている。

３　学校と家庭の連携について

⑴　家庭学習の時間は、定着したか





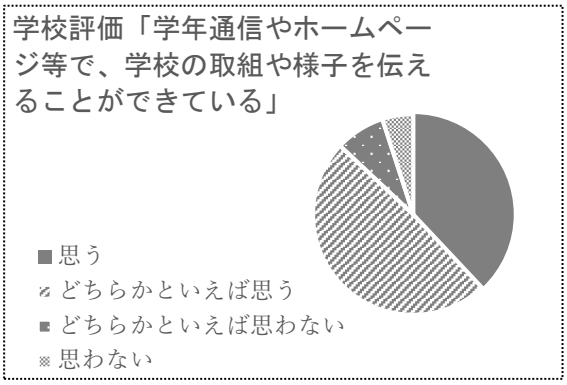
全校では、個人差はあるものの本校の目標としている学年×10 分＋20 分をどの学年も達成している。またグラフからは、テレビ(ゲームを含む)視聴時間も増加傾向にあることが分かる。２年生Ｄ児の保護者から「ゲームを毎日何時間もしていて言ってもやめない」と相談があった。そこで、保護者と連絡をとりながらＤ児の指導に当たったところ、少しずつ改善が見られるようになった。Ｄ児のような児童が、年々増えているのではないかと予想される。

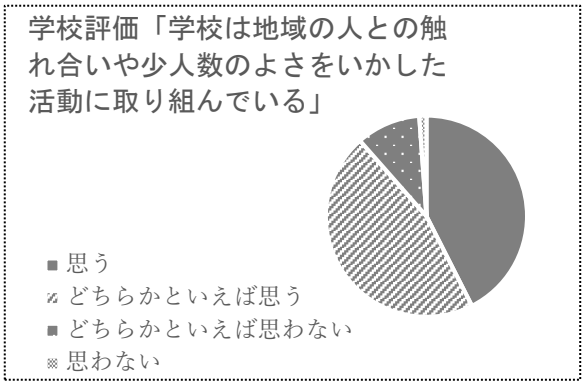
【学習強調週間中のＤ児のゲーム時間】

	5 月	6 月	7 月	9 月	10 月	11 月	1 月	2 月
ゲームの時間	63 分	70 分	46 分	45 分	34 分	64 分	35 分	33 分

⑵ 保護者との連携は図られたか

令和２年度の学校評価や「生活・学習習慣調べ」からは、多くの保護者が学校の取組を理解し、協力してくれていることが分かる。また、「生活・学習習慣調べ」のコメントを見ると、家庭で困っていること、児童の家での様子、自分の子どもに求めていることなど様々な保護者の思いを垣間見ることができる。そうした保護者の気持ちに寄り添い、教師が関わることもできる。児童にとっても、自分にしっかり関わろうとしてくれる保護者からの励ましや褒め言葉は、嬉しく、やる気につながっていると思われる。





生活・学習習慣調べの家の人からのコメント

・毎日よく頑張りました。一人で勉強ができたね。すごい。
・帰ってちゃんと勉強できて偉い。苦手なところも頑張ったね。(初めて金賞になった時のコメント)
・今回は、私(母)がチェックできなかった。子どもも自主的に勉強ができなかった。私も子どもも、努力が必要です。
・漢字が、とてもかっこよく書けました。漢字直しも頑張っていてうれしかったです。(字が雑なことをずっと気にしていた保護者のコメント)
・土日はどうしてもテレビやゲームをするので運動をしたり畑に行ったりしました。ｉプリは、集中して頑張りました。
・お風呂に入って、九九を大きな声で言っていてとってもよかったよ。続けて頑張ろうね。
・めあてを意識して生活できました。冬休みも、復習と体力作りを頑張ろうね。
・時間は、世界の中で一番平等なものだと思います。その時間の使い方を１年生の時から考えて生活できたことに感謝しよう。６年間やり続けたということが素晴らしい。(６年間を振り返った時のコメント)

４　研究の成果と課題

１　研究の仮説（１）についての成果と課題（○成果　●課題）

地域の人に学んだり、地域に学習の場を広げたりするふるさととつながる教育活動を工夫すれば、ふるさとのよさを感じ、夢や誇りをもって学び合おうとする児童が育つであろう。

郷土愛を育む学習活動について

○　低学年では、生き物や自然を観察したり遊んだりといった体験活動を繰り返すことで、弓削の豊かな自然に対する愛着心が湧き、みんなに知らせたい、自慢したいという気持ちが芽生えた。また、学校を離れたところでも積極的に地域の人に関わろうとする児童が見られるようになった。

○　高学年では、地域の人から学ぶことでふるさとのよさを再認識し、新たに課題を見つけて意欲的に調べるなど、学ぶ楽しさを実感したことが主体的な学びにつながった。また、地域の人の生き方や考え方に触れることで、自分自身の将来に目を向けることができた。

○　地域の人が、児童の発言や行動を褒めたり、個々の願いを受け入れながら活動の場を提供したりと愛情をもって接してくれたことで、児童は満足感を味わうことができた。また、身近な地域で友達と一緒に体験した活動を通してもった思いを友達と共有したり、異年齢集団で様々な活動に取り組んだりすることで、成就感を味わった。人から認められるこうした場が増えたことで、自分に自信が持てるようになり、自己肯定感や自己有用感が高まったと考えられる。

○　ＩＣＴを活用することで、直接会わなくても意見交換をしたり情報を共有したりすることができ、時間に縛られずに学習を進めることができた。また、発信する方法が増え、多くの人に自分たちが学習した成果を見てもらえるようになったことが、児童の自信や達成感の獲得につながった。

○　地域コーディネーターの協力により、地域の自然や人材を生かした幅広い体験的な活動が進められるようになった。また、今まで学級担任がしていた日程調整などの仕事の削減にもつながり、授業の準備等に時間を充てることができるようになった。

●　地域の人や自然との触れ合い活動を多く取り入れたいと思えば思うほど、他教科の学習時間や学校行事との日程調整が難しくなる。さらに、自然や生き物との触れ合いは、潮の満ち引きや天候、地域の環境の変化などを考慮する必要があり、計画を立てにくい。活動を通して何を感じさせ何を学ばせたいのか、明確な意図を持って時期や時間を検討した上で、充実した学習になるよう計画を立てていく必要がある。

２　研究の仮説（２）についての成果と課題（○成果　●課題）

少人数に応じた指導や学び合いの場を工夫し、分かる授業づくりに努めれば、確かな学力が身に付き、自信をもって自分の考えを表現し、自主的に学び合おうとする児童が育つであろう。

少人数のよさを生かす算数科の学習指導について

○　算数科において「フラッシュ学習」「トライ学習」の二つの見取りの場を設けたことで、児童の理解の状況を把握した上で授業展開を修正していくことができ、分かる授業づくりにつながった。

○　「個人カルテ」を活用することによって、教師も児童も、何を学ぶのかが明確になり、単元全体を見通した学習を進めることができた。また、「算数日記」と併用し、様々な方法で個々の理解を見取ることで児童のつまずきに早く気付くことができ、早い段階で個に応じた指導をすることができた。さらに、児童の思いを受け入れながら個別に対応することで、児童の学習に対する姿勢が向上し主体的な学びにつながった。

○　ペアや小集団の学び合いを積極的に取り入れたことにより、伝える楽しさやよさを感じることができ、自分の考えを意欲的に表現しようとする児童が増えた。

○　新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、小集団による活動ができなかった時期があり、小集団での学習がいかに重要であったか改めて気づかされた。友達と確かめ合ったり自分の考えを伝えたりする場がなくなると、学習内容が定着しにくくなり、新しい考えに気付くことも難しくなった。児童からも「友達と一緒に考えたい」という声が聞かれ、友達との学び合いを楽しんでいたことが分かった。ペアや小集団での学び合いは、学力の定着や主体的な学びにつながり、算数が得意、苦手に関わらず全ての児童に必要な場となっていることが分かった。

●　算数の調査結果によると、平均正答率は全体で見ると全国平均より上回っているが、正答率が下降傾向にある学年がある。また、年々学習面において配慮を要する児童が増えている。今後も、一人一人を見取り、適切な指導の充実を図るとともに、特別支援教育の視点を生かした分かりやすい指導の在り方を研究し、授業改善に取り組んでいきたい。また、ＩＣＴを活用し視覚化することが児童の学びの支援になっていることから、今後は、１人１台のタブレット端末を使った効果的な指導法についても研究していきたい。

学校・家庭・地域との連携について

○　学校と家庭・地域が連携することで復習の場が増え、学力の定着につながった。また、より専門的な知識や技術を学ぶことができ、児童の好奇心を高め、充実した活動につながった。

○　「生活・学習習慣調べ」を活用することで、学校と家庭が連携を図りながら学習習慣を見直すことができた。また、教師側からは、家庭の様子や保護者の願いを知る手立てとなり、保護者側からは、教師からアドバイスを受けるきっかけになった。児童にとっても、自分の頑張りを保護者や教師に認められる場となった。

○　教師、保護者、地域の方、学生など様々な立場の人が児童の活動を支援したことで、児童は大切にされていることを感じ、自分の頑張りを素直に受け入れることができた。

●　本校は、地域や保護者から積極的な協力が得られている。しかし、家庭環境は様々で、子どもの学習をしっかり見守れない家庭もある。今後も学校や学年便り、ホームページなどを使って学校の取組や児童の様子を知らせ、地域や保護者と寄り添いながら共に児童の望ましい学習習慣や生活習慣の定着に努めたい。